学位論文の要約

「教師である」ことをめぐる教師の解釈実践に関する教育社会学的研究

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻　教育学分野

D150222　　伊勢本　大

Ⅰ．論文題目

「教師である」ことをめぐる教師の解釈実践に関する教育社会学的研究

Ⅱ．論文構成

序　章　研究の目的

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討

第３節　本論文の課題と構成

第１章　教職の問題をめぐる研究の射程

第１節　はじめに

第２節　「教育問題」の中の教師

第３節　「教育改革」の中の教師

第４節　「多忙」の中の教師

第５節　まとめ

第２章　研究の枠組みと調査の概要

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討と本研究の問題関心

第３節　教師の〈語り〉が置かれる文脈への着目

第４節　教師の〈語り〉に対する解釈実践に向けて

第５節　調査の概要と研究協力者について

第３章　「教師である」とはいかに語られるか

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討と分析の視点

第３節　「共有された物語資源のストック」としての「献身的教師像」

第４節　「献身的教師」をめぐる教師たちの解釈・交渉実践

第５節　まとめと考察

第４章　「献身的教師像」をめぐる教師の解釈実践

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討と研究協力者の選定

第３節　教師に求められる「子ども理解」への批判的解釈

第４節　「献身的教師像」との共振

第５節　まとめと考察

第５章　「教師であった」とはいかに語られるか

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討

第３節　休職／離職経験をめぐるライフヒストリー

第４節　「教師であった」ことの解釈・交渉実践

第 5 節　まとめと考察
終　章　「教師であるとはどういうことなのか」
第 1 節　結果の要約
第 2 節　考察と課題

Ⅲ．論文の要約

序章　研究の目的

本研究の目的は，研究協力者である教師たちの〈語り〉から「教師である」という物語がいかに構成されるのかを明らかにすることである。

教師に対する世間のまなざしは錯綜している。そこで看過されているのは，そもそも「教師である（being a teacher）とはどういうことなのか」（佐藤 1997，p.5）という根源的な問いであり，それに対する社会学的な洞察である。教育社会学に関する先行研究は，これまで教師の職業アイデンティティに関する「形成」と「特徴」（Beijaard et al 2004）を明らかにすることで，この問いに答えようとしてきた（例えば，高井良　2015，久冨編　2018 など）。

しかし上記の議論は次の限界と課題も抱えている。それは，教師たちが一枚岩的で本質的な職業アイデンティティしか持ち得ていない，といった誤った理解を促すことにある。そうした課題を乗り越えるため，本研究は職業アイデンティティを表す教師のストーリー，つまり〈語り〉にアプローチする。それは「教師である」という，一人ひとりの職業アイデンティティ（とよばれるもの）がいかなる言語的資源（narrative resources）によって構成／達成されるのか。その物語論理や表現方法へと分析の焦点を移すものである（Søreide 2006，p.528）。

「教師である」ことを表象する「存在論的語り（ontological narratives）」（Somers & Gibson 1994）とは，教師が自分自身をいかに理解し，またいかに理解されたいのか，という解釈実践であり，その交渉の過程である（Søreide　2006）。ここでいう解釈実践は現実構築の方法と内容の両方を指す（Gubriumu & Holstein 訳書 2006p.146）。つまり「言語行為から絶えずその世界の意味を探索し構築し確認する日常の諸活動」（古賀 2001，p.28）を意味する。

こうした，「教師である」ことをめぐる教師の解釈実践への着目は，これまで教育社会学において前提とされてきた一枚岩的でスタティックな教師の職業アイデンティティに関する考え方そのものを教師たちの〈語り〉から捉え直す視座を提起する。と同時に，教師に対するまなざしが錯綜する今日的状況に向けた建設的な議論を，教師自身の立場から検討する研究的可能性と意義を示すことを可能とする。ゆえに，以下では先行研究との差異化を図り，アイデンティティという用語を使用しない。本研究が明らかにするのは，あくまでもそれを表現するための教師たちの方法と内容についてである。

以上にもとづき，本研究は次の 3 つの研究課題を設定した。第 1 に，いかなる言語的資源から「教師である」ということが語られていくのかという検討である（第 3 章）。第 2 に，

教師に向けて語られる公共の言説を教師はいかに捉え，〈語り〉として表象するのかという分析である（第 4 章）。そして第 3 に，休職／離職者である（元）教師たちが教職経験をめぐる「教師であった」ことの物語をいかに語るのか，という考察である（第 5 章）。

油布・山田（2019）が指摘をするように，教師は過剰に語られる一方で，これまで当事者である教師自身の〈語り〉から教職そのものが検討される機会はほとんどなかった。そのため，教師たち自らが「教師である」という物語をいかに構成するのか，という本研究の議論は，教育社会学，そして今後の日本社会においてもきわめて重要なものとなる。

第 1 章　教職の問題をめぐる研究の射程

第 1 章では，これまで蓄積されてきた教育社会学に関する教師を対象とした研究を整理することで，過去から今日かけて教師に向けられるまなざしや教師を取り巻く問題がいかに変化してきたのか。また，そのことに教育社会学に関する研究がいかに対峙してきたのか，を明らかにした。そしてその上で，教師研究の文脈の中に本研究の取組みを位置づけた。

具体的には，「教育問題」における教師研究の議論，「教育改革」に関する教師研究の議論，近年とくに大きな社会問題として顕在化してきた「働き方」をめぐる教師研究の議論という 3 つに大別し，それぞれの成果と課題を指摘した。そうした整理をふまえ本章では，教育社会学における教師研究として，教師の〈語り〉から「教師であるとはどういうことなのか」という問いに向き合う研究的意義とその可能性について論じた。

第 2 章　研究の枠組みと調査の概要

第 2 章では，次章からの分析に先駆け，インタビュー内のやりとりから構成される研究協力者である教師たちの〈語り〉を，どのように解釈＝記述することができるのか。このことに関連する先行研究を整理し，これまで蓄積されてきた教育社会学における質的な研究の理論的検討を行うことで，本研究の方法と〈語り〉の分析に関する枠組みを明確にした。

加えて，本研究における調査の概要と研究協力者たちについて説明した。筆者は 2012 年から今日まで継続して，学校現場で働く（あるいは働いた経験を有する）教師たちへライフヒストリー・インタビューを行ってきた。調査協力の依頼に関しては，年齢などの偏りがないよう配慮しながら，Goodson & Sikes（訳書 2006）の示す指標を参考にその機会を広げてきた。本研究で分析の対象とするのは，その中で調査に協力してくれた 30 名の公立小中学校の教師たちの〈語り〉である。そのため，本研究における教師とは公立小中学校の教師を指している。なお，その中には休職／離職を経験した者もいる。

第 3 章　「教師である」とはいかに語られるか

第 3 章では，本研究の中心課題となる「教師であるとはどういうことなのか」という問いに対して，研究協力者である公立小中学校の教師たちの〈語り〉によって，その物語

がいかに表現され，形づくられていくのかを分析した。その結果，研究協力者たちがある共通した参照枠を用いて「教師である」ことを語っていることが明らかとなった。

インタビューの中で研究協力者たちに学校現場の状況や，教師としての生活のことを尋ねると，真っ先に返ってくるのが「とにかく時間がない」ために毎日が「しんどい」という「労働者」としての感覚を訴える〈語り〉であった。そしてそれは「子ども＝児童生徒（に関する社会的カテゴリー）」をめぐる〈語り〉を内包しながら展開されていた。しかし，そうした教職の「しんどさ」に関する〈語り〉が生まれる論理を構成し続けるのもまた，研究協力者たち自身に他ならない。というのも，彼／女たちはそうした物語に寄り添うことによって，教師としての「喜び」や「やりがい」を語ることが可能にもなっていたからである。つまり「子どものため」という言い回しによって成り立つ「献身的教師」をめぐる言語的資源は，この職業について表象する上で不可欠な，教師たちの中で「共有された物語資源のストック（a shared stock of narrative resources）」（Holstein & Gubrium 2000，p.117）としての役割を果たしていた。

他方で，研究協力者たちが上記の言語的資源をいかに活用しているのか。その用語法（イディオム）に着目すると，共有されたストックとしての「献身的教師」に対する理解には，個々で多様な解釈実践があり得るということも明らかとなった。つまりそこから形作られる，自分が「教師である」という物語は様々な〈語り〉として構成される。だが一方でこのことは，自らを「教師である」と語るために，彼／女たちがそれ以外の言語的資源を手にする余地がなかったことも意味していた。

第 4 章　「献身的教師像」をめぐる教師の解釈実践

前章の結果に鑑みて，本章では研究協力者が共通して用いた「献身的教師像」に関する物語と教師個人の〈語り〉の関係について考察した。具体的には，「教師は子どもを理解しなければならない」といった「献身的教師像」によって形づくられる公共の言説（＝《教師批判言説》）を教師自身がいかに語るのかに着目した。

その結果，「献身的教師像」からなる物語への対抗クレイムを示しながらも，そうした論理へと共振せざるを得なくなってしまう教師の〈語り〉が示された。それは，研究協力者の《教師批判言説》に向けた懐疑的な解釈を，必ずしも当人の本意ではない〈語り〉へ導くというパラドキシカルな帰結を招くものであった。

本章で浮かび上がったのは，研究協力者が「水戸黄門の印籠」として表現した「献身的教師像」の呪縛から逃れることが困難な，教師という職業の社会的特質である。学校教育に従事し，かつ子どもと常に向き合わなければならない職業であるからこそ，子どもの問題を「丸ごとは抱えられない」と経験的には理解していても，事件や問題が起きた際「子ども」のことを理由にその責任が問われると，その場に則さない個人的な想いは「口が裂けても言えな」くなってしまう。教師の個人的な〈語り〉とは相反しながらも，語らざるを得ない〈語り〉が学校現場には確かに存在すること，そしてそれが「子ども」に関する社会的カテゴリーから構成されていることが明らとなった。

第 5 章　「教師であった」とはいかに語られるか

第 5 章では，現職の教師ではなく，休職や離職経験を有する研究協力者たちに着目し，彼／女たちが「教師であったとはどういうことなのか」という物語をライフヒストリー・インタビューの中でいかに表現するのか，について考察を行った。インタビューでは，休職／離職へ至る〈語り〉が示される際も，共通して自らの実践が「子どものため」にあることを主張する論理が構成された。つまり，研究協力者における休職／離職経験をめぐる「教師であった」ことの物語とは，当事者たちが自らを「献身的教師」だと位置づけることで，その理由を提示しようとする解釈実践であったということができる。

以上にもとづき本章は，教職を離れる理由を語る上で，別の空間に位置する私生活と教職生活（のストーリー）を織り交ぜ，1 つの物語を形づくることが，当事者にとって，非常に複雑で困難な実践であることを指摘した。だからこそ，休職／離職に至る物語を説明するためのひとまずの理由として，誰からも「受け入れられる・理解される」教職の伝統的で支配的な物語，すなわち子どものために自らを犠牲にするような「良い」教師像（“good” teachers）（Schaefer ら 2014，p.24），まさに「献身的教師像」を構成する〈語り〉が参照枠として用いられることになっていたのである。

本章で着目すべきは，休職／離職経験を有する研究協力者たちも「教師であった」ことを表現するために一元化される教師の〈語り〉を用いたことにある。休職／離職をめぐるそれぞれの物語が本来多様な文脈の中で語られ，記述され得る可能性を有する一方（藤原 2013），何層にもわたる複雑な過程を 1 つの物語として構成する中で，（元）教師たち自ら，教職の支配的な物語である「献身的教師像」を返ってエンパワメントしてしまう，という逆説がそこにはみてとれる。そしてそれは，3 章，4 章で明らかとなった教師たちの一元化される〈語り〉が，多面的で多元的な背景文脈をもって語られていることを改めて証左するものであった。

終章　「教師であるとはどういうことなのか」

本章では，教師たちの〈語り〉から「教師である」という物語がいかに構成されるのか，という本研究の議論を総括した。「教師であるとはどういうことなのか」。序章で示したこの問いに対して，本研究の議論から導かれる 1 つの回答とは，教師個人が「献身的教師」をめぐる物語と対話し，その物語といかに折り合いをつけながら自らの職業について語ることができるのか，というフレキシブルな解釈・交渉実践であった，と結論づけられる。

本研究の知見は，「献身的教師像」というこの職業を表象するために不可欠な共有されたストックとしての言語的資源が使用される際も，その用語法（イディオム）は文脈によって揺れや差異が表れ，一人ひとりの「教師である」という個別の物語が，それぞれ異なる形で紡がれている，という開かれた可能性を示している。これまでの先行研究は，教師の職業アイデンティティ（とよばれるもの）を本質的に捉え，理解しようとしてきた。他方で本研究が明らかにしたのは，そうしたアイデンティティの議論が有する限界であり，そのなかで看過さ

れてきた「教師である」という「複雑性（complexity）」への問いに目を向けることの重要性である。つまり，教師についてこれまで自明のものとされてきた，例えば「聖職者／労働者／（準）専門職」といった一般化を可能とするカテゴリーを相対化する視点・結果を提示し，教師たちを一人の人間として理解するための枠組みとその意義を提起しているのである。

またそれは，近年注目を集める学校の働き方に対しても示唆を与えるものとなる。教師の長時間労働の問題改善については，学校現場の働き方を見直すという方向で現在議論が進められている（文部科学省 2017）。だが，本研究で明らかにしたように，「献身的教師」についての言語的資源が共通して用いられる教師たちの現実に鑑みた場合，労働形態にアプローチする制度的な改革のみでは，望ましい結果が見込めないことが予想される。なぜなら，それが「子どものため」という〈語り〉へ向き合わなければならない（と語る）教師たちの物語に，大きな変化をもたらすものではないからである。

教師のライフヒストリー研究の権威である Goodson（2012）は「物語の資本（narrative capital）」が豊かであることが，教師としての生を歩む上で重要だと論じた。そのためにはまず前提として，教師個人の「支えとするストーリー（story to live by）」（Connelly & Clandinin 1999）が，十分に担保される場が用意されなければならない。本研究が示唆するように，教師たちに共有されたストックとしての「献身的教師像」から語られる「教師である」という物語とはまた別の，オルタナティブな〈語り〉も肯定される可能性を今後研究として拓いていくことが求められるのである。

本研究ではあえて研究協力者を世代やジェンダー等によって分類せず，インタビューにおけるやりとりそのものに焦点を当てた。だが今後は，「女性教師」独自の〈語り〉を検討している浅井ら編（2016）や「現場の教授学」（古賀 2001）等に示される，それぞれのカテゴリーや属性についても着目し考察を深めていくことが課題となる。

Ⅳ．主要参考文献

Beijaard, D., Meijer, P. C., & Verloop, N., 2004, “Reconsidering research on teacherers’ professional identity”, *Teaching and teacher education*, Vol.20, No.2, pp.107-128.

Clandinin, J. D., 2000, *Narrative Inquiry*, Jossey-Bass.

Clandinin, J. D. et al. 2006, *Composing Diverse Identities*, Routledge（＝2011，田中昌弥訳，『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ』明石書店）.

藤原顕，2013，「教師のライフヒストリー研究に関する方法論の検討」『福山市立大学教育学部研究紀要』1 巻，pp.79-94.

Goodson, I. F（藤井泰・山田浩之編訳），2001，『教師のライフヒストリー』晃洋書房。

Goodson, I. F , 2012, *Developing Narrative Theory*, Routledge.

Goodson, I. F , & Sikes, P., 2001, *Life History Research in Educational Settings*, Open University Press.,（＝2006，高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢訳『ライフヒストリーの教育学』昭和堂）.

Gubrium, J.F. & Holstein, J. A ., 2000, Analyzing Interpretive Practice., Denzin, Norman K and Yvonna S. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research,* secondedition, Sage Publications, pp.457-487.,（＝2006，古賀正義訳，「解釈実践の分析」平山満義監訳，『質的研究ハンドブッ ク』2 巻，北大路書房，pp.145-167.）。

広田照幸，1998,「学校像の変容と〈教育問題〉」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学他『岩波講座　現代の教育第 2 巻　学校像の模索』岩波書店，pp.147-169.

Holstein，J. A . & Gubrium, J.F., 1995, *The Active Interview* , Sage Publications,（＝2004，山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー』せりか書房 ）.

Holstein，J. A . & Gubrium, J.F., 2000, *The Self We Live By*, Oxford University Press.

伊藤敬，1979,「『教師の社会学』の視点と展望」『教育社会学研究』第 34 集，pp.50-63.

神林寿幸，2017,『公立小・中学校教員の業務負担』大阪教育出版。

川村光，2009,「1970-80 年代の学校の「荒れ」を経験した中学校教師のライフヒストリー」『教育社会学研究』第 85 集，pp. 5-25.

北澤毅，2015,『「いじめ自殺」の社会学』世界思想社。

古賀正義，2001,『〈教えること〉のエスノグラフィー』金子書房。

久冨善之，2012,「学校・教師と親の〈教育と責任〉をめぐる関係構成」『教育社会学研究』第 90 集，pp.43-64.

久冨善之編，2008,『教師の専門性とアイデンティティ』勁草書房。

久冨善之編，2018,『教師の責任と教職倫理』勁草書房。

Lortie, D. C., 1975, *Schoolteacher*, University of Chicago of Press.

耳塚寛明・油布佐和子・酒井朗，1988,「教師への社会学的アプローチ」『教育社会学研究』第 43 集，pp.84-120.

文部科学省，2017,『学校における働き方改革に係る緊急提言』。

野口裕二，2005,『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房。

越智康詞，2000,「『制度改革』のなかの教師」永井聖二・古賀正義編『《教師》という仕事＝ワーク』学文社，pp.143-165.

越智康詞・紅林伸幸，2010,「教師へのまなざし，教職への問い」『教育社会学研究』第 86 集，pp.113-136.

Schaefer, L., Downey, A. C., & Clandinin, J. D., 2014, “Shifting from Stories to Live By to Stories to Leave By”, *Teacher Education Quarterly*, Vol.41, No.1, pp.9-27.

Sacks, H., 1979, “Hotrodder,” Psathas, G, ed., *Everyday Language,* Irvington Publishers, pp.23-53.,（＝1987，山田富秋・好井裕明，山崎敬一編訳「ホットロッダー」『エスノメソドロジー』せりか書房，pp.19-37）.

酒井朗，1998,「多忙問題をめぐる教師文化の今日的様相」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院，pp.223-248.

桜井厚，2002,『インタビューの社会学』せりか書房。

佐藤学，1994,「教師文化の構造」稲垣忠彦・久冨善之編『日本の教師文化』東京大学出版会，pp.21-41.
佐藤学，1997,『教師というアポリア』世織書房。
志水宏吉編，1998,『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院。
新堀通也，1973,「現在日本の教師」『教育社会学研究』第 28 集，pp.4-17.
白松賢，2004,「マジックマッシュルームとは何か」『教育社会学研究』第 74 集，pp.189-207.
Somers, M. & Gibson, G., 1994, Reclaiming the Epistemological “Other”, Calhoun, C. ed., *Social Theory And The Politics Of Identity*, Blackwell, pp.37-99.
Søreide, G. E., 2006, Narrative Construction of Teacher Identity, *Teachers and Teaching*, Vol. 12, No. 5, pp. 527- 547.
平英美・中川伸俊，2000,「序」平英美・中川伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社，pp.3-16.
高井良健一，2007,「教師研究の現在」『教育学研究』第 74 巻第 2 号，pp.251-260.
高井良健一，2015,『教師のライフストーリー』勁草書房。
田中昌弥, 2011,「教育学研究の方法論としてのナラティブ的探求の可能性」『教育学研究』第 78 巻，第 4 号，pp.411-422.
塚田守，2002,『女性教師たちのライフヒストリー』青山社。
内田良，2015,『教育という病』光文社。
Whitty, G.,2002, *Making Sense of Education Policy*, SAGE Publication（＝2004，堀尾輝久・久冨善之監訳『教育改革の社会学』東京大学出版）.
山田浩之，2010,「信頼と不信」『教育社会学研究』第 86 集，pp.59-74.
山田浩之，2013,「『教員の資質低下』という幻想」『教育学研究』第 80 巻，p.453-465.
山田哲也，2018,「教師という仕事」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア２』岩波書房，pp.123-143.
山田哲也・長谷川裕，2010,「教員文化とその変容」『教育社会学研究』第 86 集，pp.39-58.
山田富秋，2011,『フィールドワークのアポリア』せりか書房。
油布佐和子,「教師という仕事　序論」油布佐和子編『教師という仕事』日本図書センター，pp.3-18.
油布佐和子, 2010,「教職の病理現象にどう向き合うか」『教育社会学研究』第 86 集, pp.23-38.
油布佐和子・山田浩之，2019,「概説：改革の時代の教師と教師研究の現在」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版株式会社，pp.408-411.